

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月27日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830044

研究課題名（和文） 公衆衛生が変えた母子関係

研究課題名（英文） Transformation of the Mother-child relationship by the public hygiene

研究代表者

藤田 雄飛（FUJITA YUHI）

大阪大学・大学院人間科学研究科・助教

研究者番号：90580738

研究成果の概要（和文）：本研究は、19-20世紀転換期のフランスにおいて生じた母子関係の変容を、科学的発見やパリの都市改造、さらには政治的な制度の展開などからなる絡まり合いの中から明らかにすることを目指したものである。それは、母子の暖かな関係性が歴史的産物であることを示すとともに、そこに様々な制度や表象が入り込んでくることを確認する作業として位置づけられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I aim to describe the emergence of the “mother-baby” relationship as the form we know today on the scientific-spatial-political background. Especially, an epoch-making discovery and the transformation of Paris and the institution must play a vital role. Thus, I’ll indicate that the “mother-baby” relationship is historical matter, and there, diverse institutions and powers and representations stream in.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	860,000	258,000	1,118,000
2011年度	860,000	258,000	1,118,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,720,000	516,000	2,236,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：母子関係・授乳・細菌

1. 研究開始当初の背景

本研究は、母親と子どものあたたかな関係それ自体が近代という時代の中で形成されてくる過程を明らかにすることを目指したものである。特に、フランスで近代初頭に至るまで続いていた乳母による育児や子捨ての伝統は、今日の教

育学のみならず子どもを対象とする人間諸科学の諸理論が前提としている母と子の濃密な関係をそもそも不可能なものとしていた事実として、看過されるべきではない。バダンテールBadinterによれば1780年のパリでは、生まれた子どものうちの9割以上が里子に出されていたという」（バダンテール、『母性という神話』、

鈴木晶訳, ちくま学芸文庫, 1998)。里子に出された子どもたちは地方の村に住む乳母たちのもとへと運ばれていったが, それらの子どもたちの生は保証されたものとは言い難かった。

こうした, 母と子の切断とも言えるような状況は19-20世紀転換期に徐々に変化していったと考えられるが, これまでの母子関係に関する諸研究はルソーの『エミール』の社会的インパクトがそのまま乳母への子どもの委託を終了させ, 母と子が愛情溢れる関係へと入っていったとして, 言説の影響力を高く見積もり, この前提を素朴に共有してきたと考えられる。それは, 18世紀に生じた新しい母親の登場を「母性という神話」の創出のうちに見出し, そうした神話を生み出したものとして『エミール』をまずもって挙げるバダンテールや, 乳母の消滅の契機を18世紀のエリート女性に芽生えた子どもへの愛情のうちに見るとともに, そうした観念が上流階級から下層階級へと浸透していった過程によって説明するサスマンSussmanにおいて共有されている認識だと言える(Sussman, *Selling Mother's Milk*, University of Illinois Press, 1982.)。ここには, 『エミール』によって母子関係を巡るすべてが変わったかのような過信があるとさえ言えよう。しかし, 貴族階級と下層階級を中心に乳母への子どもの委託という状況が残存していったという歴史的事実と, それが『エミール』から150年ほどの時を経て20世紀初頭になってようやく変化し, 母子が接続されるというもう一つの事実は, こうした母と子の切断と(再)接続を巡って, 思想の影響力とは異なった回路が働いていたことを予感させるものである。

2. 研究の目的

以上のような関心のもと, 本研究ではフランスにおける母子の接続という出来事を一つの歴史的な転回点のうちに見出していく。それはすなわち, パスツールによる細菌の発見である。

一見, 母子の関係性とは無関係に思われるこの科学的な出来事が, 母子を結びつける紐帯に決定的な影響を及ぼしたことを明らかにするのが本研究の目的である。その際, これらの出来事の背景となる状況をあぶり出すために, 人々が生きる都市の状況と, その都市の表象の二つの側面についても研究を行っていくが, この両者を貫く観点こそ, 18世紀末にその姿を現し始め, 19世紀における科学的発見を契機に都市を席卷することになる「衛生hygiène」という観念の広まりである。事実, この時代, 衛生は医学的言説や政治的な取り組みのなかで人々の生活の内部へと浸透して行くとともに, 教育を含み込みながらパリという都市構造そのものを激変させるに至る。都市の状況と表象の変化, 医学への関心, 科学的発見とそこにおいて生じる身体へのまなざし。これらが複雑に絡み合っただけでなく, ネットワークを形成していくなかで, 母子の接続が生じてくると考えられるのである。

加えて, 本研究では母子の関係性を描き出すための主要なモチーフとして「授乳」に特に注目していくこととする。この授乳についてはルークスLouxが述べるように, 子どもの乳母への委託というフランス的な養育のスタイルと切り離すことはできない(ルークス, 『母と子の民俗史』, 福井憲彦訳, 新評論, 1983)。そして, この「乳を与える」という行為に注目するとき, 私たちはそこに, 科学的発見の影響と技術的進歩の産物, さらにそれを取り巻く社会的な制度の創出を見いだすことができるだろう。それらの具体的な相を, この「衛生」という観念との関係において描き出すことを本研究は目指していくこととする。

3. 研究の方法

本研究は, 今日の教育理論や教育関係論のベースとも言うべき「暖かな母子関係」が, 歴史的産物でありうるということを, 人々の諸実践とそれが置かれた社会状況や空間的な位置, さ

らにはそこに決定的に影響を与えた科学的出来事から描き出していくものである。その際、従来の歴史研究が困ってきた思想家の言説の影響力を一旦括弧に入れるとともに、人々が生み出し、それを生きていた「実践の思想」とも呼べるものにスポットを当てながら、母子関係を巡るさまざまなネットワークの総体へとアプローチしていくこととする。そのために、関連領域の歴史研究を可能な範囲で総覧するとともに、そこに潜む関係をあぶり出すことを目指す。また、パリのマレ地区にあるアルシーヴ・ナショナルで19-20世紀転換期の子どもと母親を巡る原資料を収集することで、実践の具体的な諸相を確認していく。なお、膨大な原資料の中でも、今回は特に「授乳」を巡るさまざまな状況を示す資料、「粉ミルク」と「哺乳瓶」に関する広告や宣伝や医師による解説、「乳児託児所」の設立に関する請願書などに絞って検討していく。

4. 研究成果

(1) 都市という背景 18世紀末、パリは瘴気 *miasme* 漂う危険な都市であった。立ちこめる悪臭への恐怖から、空気の循環を良くし、絶えず新鮮にしておくことを目指して都市空間の再編成が試みられ始める（ヴィガレロ、『清潔になる〈私〉』、見市雅俊監訳、同文館、1994）。そして19世紀、第二帝政下のパリは、オスマンによって大規模な改造に着手される。まず、パリ市内にあった不潔な密集住宅地はことごとく取り除かれ、直線を基調とする太い街路がそこには通されていった（日端康雄、『都市計画の世界史』、講談社現代新書、2008）。また、アパルトマンの建築においても、均一性が重視され、高さやファサードなどが細かく規定されていく中で、統合的な都市空間と併せて、均整の取れた集合住宅という秩序的な住環境が整備されていく。同様に、上下水道の整備は、それまで入浴の習慣を持たなかったパリの人々の生活の中に、入浴による「清潔」という概念を持ち

込むことになる。不潔な密集状態の中で汗にまみれ、悪臭に包まれて生活していた都市の民衆の身体はこれ以降、清潔によって貫かれていくのである（ヴィガレロ、前掲書）。

このように、一見、都市型のインフラ整備事業の延長として見えるパリ改造には、「衛生」を基軸とした空間的秩序によって人々を矯正しようとする、政治的思惑と医学的関心の絡み合いを読み取ることが可能である。そして、興味深いことに、こうした状況にあって教育は、まずもって「衛生」という概念を下層階級の民衆に植え付ける役割を果たしたのであり、産業社会の進展によって都市に流入してきた農民たちからなるプロレタリアートこそがこの「教育」の対象だった。労働者共同住宅と浴場の建設は、この「教育」に完全に呼応する。清潔で換気の行き届いた住居と十分な身繕いを可能にする水道設備は、そこに住まう労働者達に対して身体の清潔さを保つことと住居をきれいに保つことを同時に要求するものである。この身体の清潔化と住環境の秩序化によって、人間と彼を取り巻く環境のあいだに身体的関係が生み出されるとともに、清潔と道徳を巡るアナロジーが形成されていく（クセルゴ、『自由・平等・清潔-入浴の社会史-』、鹿島茂訳、河出書房、1992）。このように、衛生はこの時代、身体と環境を巡る道徳として、空間と人間を貫いていった。

こうした公衆衛生都市パリを背景として、19世紀のある科学的発見が母子関係に変化を生じさせていく。すなわち、パストゥールによる細菌の発見と殺菌技術の発明である。

(2) 細菌と哺乳瓶 ドイツのコッホKochとともに近代細菌学の父として並び称されるパストゥールPasteurの偉業は、発酵という現象が自然発生するのではなく、あるミクロな生物によって引き起こされていることを明らかにすることによって、19世紀後半のパリで新しい形の「衛生」を生み出したことにある。1857年の乳酸発

酵素の発見にはじまる微生物革命は、フランス科学アカデミーを巻き込みながら、1870年代の終わり頃には病原微生物が大気中に散在しているという表象を普及させていくことになる（ピエール・ダルモン、『人と細菌』、寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005）。このことは、それまでのような瘴気によって運ばれる得体の知れない死の恐怖が、「細菌」としてその場を特定されたことを意味している。それは言い換えるなら、恐怖に対する対処の仕方を変容させるなかで、衛生を巡る表象もまた変容していったことを端的に示している。もはや問題は、汚れやおおいという目に見えたり感じたりすることのできるものの除去ではなく、細菌という「目に見えぬ怪物」への対処へと移行した。こうした中で、清潔を判定する知として、衛生的な予防医学が統計学を巻き込みながら権力を握っていったのである（富永茂樹、「統計と衛生」、『都市の憂鬱』、新曜社、1996）。

ところで、この時代、こうした細菌という恐怖の源泉への対処法は低温殺菌という形ですでにパストゥールによって発明されている。この殺菌という技術こそ、母と子の間において子育てのあり方を変化させる「モノ」としての哺乳瓶にそれまでとは全く異なった可能性を与えたものに他ならない。

パストゥール革命に先立つ18世紀にも、人工栄養によって捨て子達を養育しようという取り組みが医師達によって行われていた。しかし、錫や陶製の哺乳瓶は吸い口が狭く、綺麗に洗うということが難しかったが故に、雑菌が繁殖し、多くの子ども達が胸部や下腹部の炎症や腸捻転によって死んでいった（ボームスラグ・ミッチェルズ、『母乳育児の文化と真実』、橋本武夫監訳、メディカ出版、1999）。しかしながら、19世紀における細菌の発見は、こうした子ども達の口に触れる哺乳瓶のあり方を変えていく。ミュンヘンのSoxhletによって1886年に開発さ

れた家庭用の殺菌装置は、煮沸によって哺乳瓶の中の隅々まで除菌することを可能にした（Marie-Claude Delahaye, *Bébé au biberon*, hoëbeke, 2003）。加えて、産業革命による廉価なガラスとゴムの生産ラインが、哺乳瓶そのものの変化を後押ししていく。

また、母乳の代替物となりうる牛乳もこの時代に变化していく。フランドランFlandrinらによれば、保存が難しかったが故にそれまで流通することのなかった牛乳を都市部へと搬送可能にしたのは、1866年に開発されたコンデンスミルクという技術である（Flandrin&Montanari, *Histoire de l'alimentation*, Fayard, 1996）。牛乳を沸騰させて煮詰め、防腐剤として大量の砂糖を加えたこのミルクは、細菌の繁殖を防ぐことで「歴史上はじめて、家族が乳牛に直接近づかなくても乳幼児に牛乳を与えること」を可能にした（ボームスラグ・ミッチェルズ、前掲書）。また、その後ネスレNestlé社が1905年に設立されるが、この創業者のネスレこそ乳幼児向けの乾燥した乳すなわち粉ミルクを発明したその人であった。そしてこの粉ミルクは、その後の乳幼児の養育において中心的な役割を果たしていく。1906年、「リオン子ども保護協会」のレポートにおいて、ゴティエGauthierが粉ミルクを使った実験の成果を「ためらいもなく良い」として初めて伝えているように（Ch., Porcher, *Le lait desséché*, *Revue générale des questions laitières*, 1912）、子どもがそれを摂取しても死に至ることのないブリキ缶に入れられたこれらの人工乳が、母乳の代替物として乳母達の存在に代わって、都市へと搬送されることになったのである。

このように、パストゥールによる細菌の発見という科学的な出来事を契機として可能になった殺菌された哺乳瓶が、細菌の繁殖することのない人工乳と結びつくことによって、都市の子

どもたちの生存は支えられる素地を提供されていった。

(3) 乳児託児所 しかしながら、生まれたばかりの子ども達を里子として乳母のもとへ送るという都市の習慣は20世紀を迎えてなお、貧困層の民衆を中心に盛んに行われていた。こうした都市の下層階級にある母親たちが困難な境遇のもとに子どもを追いやっていった最大の要因は、仕事に従事しているあいだに子どもに授乳できる者がいないという社会・経済的条件にあったと考えられる。19世紀を通じて生じてきた都市への人口集中と産業革命のなかで、布製品への嗜好と連動するかたちで規模を拡大し工場を機械化していった繊維産業は、生活に窮する既婚女性を労働力として呑み込んでいったのであり（コルバン, A., 『時間・欲望・恐怖』, 藤原書店, 1993）, こうして働く彼女たちの子どもの行き場は、依然として地方の乳母のもと以外には無かったと言える。それはたとえ哺乳瓶と人工乳の衛生が確保されたとしても、変わるものではない。

こうした状況への対処として、産業革命期の1830年代に大規模なマニュファクチュールの周辺に子どもの保育の場を作るべきであるとする声は様々な識者から上がっていた

(Luc, J-N., *L'invention du jeune enfant au XIXe siècle.*, Belin, 1997)。そうした場は乳児託児所 crèche として、パリ市長補佐のマルボー Marbeau, M. によって1844年にシャイヨー街区に開設され、成功を収めることになる

(Belot, A-F., 'Vie et soins des bebes dans les premieres crèches au XIXes', Magazine l'Histoire, Le jour ou l'on mit les enfants a la crèche, no67, 1984, pp.86-9)。これ以降、この種の施設は宗教関係者と社交界の女性の二重の保護のもとで、急激に増加していくが、第二帝政に至ってその影響力に注目した政府は積極的に設立に関与するとともに、行政指導

を行うようになるのである。こうした乳児託児所の設立に向けた情勢は1900年代初頭まで続いていった (Archives National, Talon F/22/445)。このように託児所もまた、オスマンのパリ改造の最中に、人工乳や綺麗な哺乳瓶とともに母子の関係性をまさに劇的に変えるファクターとなっていったのである。

そして、1917年にアヌー Anould の製紙工場の乳児託児所の規約を見ると、そこにおいて哺乳瓶が保育活動のなかでおそらくは一般性を持って使われていることが確認できる

(Archives National, Talon F/22/446)。

こうしてパストゥール革命のインパクトと、子どもを保育する制度とが結び合い、彼らを都市の内部に留めておく状況が生み出されていった。

(4) まとめと今後の課題 19世紀から20世紀の世紀転換期のパリで、生まれたばかりの子どもと母親の関係性を変えたものとして本研究が注目したのは、「殺菌された哺乳瓶」と「粉ミルク」と「乳児託児所」という発明であり、そして何よりそれらの背後にあった「都市改造」と「衛生」という観念の登場とパストゥールによる「科学的発見」に他ならない。これらの技術や制度の絡み合いによって、歴史上初めて、母親が変わって他者が母乳以外のミルクを安全に子どもに与えることができるようになったと言える。こうした状況にあっては、もはや子どもたちはパリから離れる必要は無くなっていったのであり、母と子の再接続はここにおいてようやく、「愛」を生じさせるのに十分な状況に入っていたと言えよう。(ただし、ショーターによれば、自分の家で子どもを養育するようになるのは、第一次世界大戦前のことであるという。ショーター, 『近代家族の形成』, 田中俊宏・岩崎誠一ほか訳, 昭和堂, 1987)。

『エミール』の影響下で子どもを家庭へと連れ戻したブルジョワ階級から遅れること150年,

ようやく働く民衆の子ども達が家庭へと戻るネットワークが形成されたと言える。ただしこれ以降、子どもを巡るネットワークからは、乳母が徐々に脱落していけらる。彼女たちの位置には、保育士と若い召使い、そして母親たちが滑り込んでくる (Perrot, M., 'De la nourrice a l'employee...Travaux de femmes dans la France du XIXe siecle', Le mouvement social, no.105, 1978)。こうして、パストゥール革命は、子どもの養育を巡る社会集団の再編成をここに生じさせていったのである。

そして母と子が家庭という場で接続され始める20世紀初頭、その接続を強固なものとする力が最前線に躍り出る。すなわち、第三共和制下の国民国家である。19世紀末から始まった育児手当は、それまで乳母に与えられていた「養育」という仕事に対する賃金を、国家が母親に提供するという図式を生み出すことになる。こうして、母親が「祖国の子ども達」を養育する「国家が承認した養母」となる図式が生み出されてきたのである (ドンズロ, 『家族に介入する社会』, 宇波彰訳, 新曜社, 1991)。

なお、最後に「研究活動スタート支援」の助成を受けて取り組んだ本研究の今後の課題を示しておくこととする。19-20世紀転換期においては、それまで乳母に委託されていた子どもが徐々に母親達の手に戻ってきたが、そこでは授乳を巡る科学・技術と制度が複雑に絡み合っていた。本研究ではそのビビッドな事例を哺乳瓶のうちに見てきたわけだが、この授乳を巡っては、その他にもかなり興味深い動きがあったことがパリのマレ地区にあるアルシーヴ・ナショナルの原資料の確認や関連する研究論文を読んでいる中で浮上してきた。例えば、この世紀転換期においては、授乳に関する国際コロックが頻繁に執り行われ、医師協会やミルク製造会社が啓蒙活動を行っている。こうした中で、知を巡る複雑なポリティクスが「授乳」を巡って生

じていたことは疑い得ないと考えられる。さらに、パリ19区のベルヴィルではグー・ド・レgoût de laitと呼ばれる母乳供給センターが現れているが、この地区が古くから労働者街であり、フランス地方都市からの流入者たちの行き交う空間であったことと、母乳供給センターがその地にあったということの間にはいかなる関連があるのかは今後の研究において取り組むなかで検討していく予定である。さらに、このころ粉ミルクの配布所もできていくが、そこにおいて子ども達の身長が測られ、その身長に見合った量が配布されていたようである。こうした中で、ミルクの摂取と子どもの身長の伸びが結びつき、「発達」が可視化されるとともに、「発達の平均」という観念が表れてきたと予想される。それは同時に子どもの身体へのまなざしが変わっていく過程としても描けるはずである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

渋谷亮・國崎大恩・藤田雄飛共著, 「子どもをめぐる科学と技術の教育思想史—世紀転換期における都市という磁場—」, 『近代教育フォーラム』, 査読無, 第20号, 2011年, pp. 207-221。

[学会発表] (計1件)

藤田雄飛, 「細菌」が変えた母子関係—公衆衛生・都市改造・殺菌技術から見えるもの—, 教育思想史学会第20回大会, コロキウム発表, 2010年9月20日, 日本大学。

[図書] (計1件)

田井康雄編・安曇茂樹・藤田雄飛他著, 『不確実性の時代に向けての教育原論—教育の原理と実践と探求—』, 学術図書出版, 2011年, 担当箇所「大人と子どもの境界線」, pp. 207-225。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 雄飛 (FUJITA YUHI)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号 : 90580738